フィルム・コメンタリー 12月2日号

- そろそろ今年を振り返り -

師走を迎え、例年の如く時間の経つ早さを感じ、また近い将来に起こるべきことを予測しながら決して安穏としていられない状況に不安を覚えるのですが、今年を振り返り、頭の中にはいくつかのキーワード的な、あくまでも個人的なことが残ります。若くして亡くなった高橋和巳（1931~1971）という作家がいましたが、その著作を何冊か読み引っ掛かったこと、また引っ掛かったといえば未完の大作「派兵」という小説を書いた高橋治（1929~2015）も筆者に深い爪痕を残しました。第一次世界大戦後の日本軍のシベリア出兵を題材とした長編小説であり、ノンフィクション的要素を加えた迫真の作品であり、力強い筆致が魅力的です。また、高橋和巳の題材として使われることの多い1960年前後の政治の時代といわれた頃の若者たちの姿も気に掛かり、筆者は心千々に乱れる状況でもあります。ここで挙げた、高橋和巳、高橋治、1960年前後の政治の時代と密接に関わる人物が大島渚（1932~2013）なのです。先日、大島渚の松竹大船での三作目に当たる『青春残酷物語』（1960）を見て、この作品の登場は一つの事件だと強く感じました。しかも、この1960年という一年に『太陽の墓場』『日本の夜と霧』という松竹大船作品としては毛並みの異なる意欲的問題作を次々と発表します。そして、『日本の夜と霧』が僅か四日間で公開中止となり、お蔵入りしていまい大島渚は松竹を去ることを決断します。大島渚のこの松竹大船での三本の作品は、実にショッキングでありスキャンダラスな性格の作品であり、その後の大島の映画作家としての方向性に大きな影響を与えるものと感じます。そして、これまで映画として表現してこなかった社会の実相を観客の前に暴き、鋭く痛みを伴うようなリアリズムを炸裂させます。

大島渚を論じることは、筆者にとって現時点では無理な話であり、より作品の分析や本人の著作やインタヴュー等での発言の内容を考える必要があるので、時間をかけた上で改めて、この場で発表することを考えています。

さて前述した高橋和巳と高橋治と大島渚の関係ですが、高橋和巳と大島渚は学部こそ違え京都大学の同学年に在籍した関係であり、高橋治は松竹大船撮影所の一年先輩に当たる助監督です。この人は、6本ほどか、監督作品を残し1965年に松竹を退社し作家活動に専念します。1984年に「秘伝」で直木賞を受賞します。小津安二郎を描いた「絢爛たる影絵 - 小津安二郎」は、数ある小津安二郎論の中でも出色の出来の作品と筆者が愛読する一冊です。

所謂「太陽族」映画とは一線を画す1960年の若者たちを描いた大島作品と対比すべく作品として取り上げたいのが、山際永三監督『狂熱の果て』（1961）です。1961年に新東宝が倒産し、制作部門は国際放映として存続しますが、配給部門として設立された大宝は四か月の短命に終わります。その四か月の中で最初に配給されたのが、この作品です。6本の作品を配給した実績を持って消滅しますが、その中の1本が松竹を去った大島渚の第一作目の『飼育』であったことも何か因縁を感じるところでもあります。新東宝時代の助監督だった山際永三の初監督作品であり、まだ20代の頃の作品です。藤木孝（篠田正浩監督の1964年の『乾いた花』での演技が光りました）と賛助出演の堀雄二以外、顔見知りの俳優は登場しません。「真摯な意図とじゅうぶんなテクニックにも関わらず作品自体、拡散を免れず鋭い批判となり得ていない」と評された作品ですが、社会の矛盾、貧困な若者たちの描写には当時のまだ色濃く残る戦争の影がくっきりと表現されます。大島渚がデヴュウ後二作目として発表した『愛と希望の街』を見た撮影所長の細谷辰雄氏が「これを見ると、ブルジョワとプロレタリアとうものは永遠に融合できないみたいじゃないか」と評しましたが、山際永三の作品にもこの言葉があてはまります。商業的な側面と芸術的なリアリズムが交錯する、1960年代日本の若者文化を背景にした意欲作とも言えるでしょう。しかし、この作品の根底には社会に向けてのメッセージとリアリズムの追求があることを忘れてはならないと思うのです。既存の社会制度やモラルの偽善に反抗する「太陽族」映画から、さらに深化し「六本木族」と呼ばれた若者たちの奔放さを描き、貧富をという二項対立を鮮明にし、自己破滅に向かう極めて人間臭さを俗っ気を交え表現します。政治の時代と呼ばれた波乱に満ちた時期に政治とは大きく距離を置いた若者たちがいたことも事実ですが、その彼らの若く激しく疲れを知らぬエネルギーの行方を山際永三は的確に捉えたと言えるでしょう。

陽の当たらない忘れられそうな映画作品というものがありますが、その中には決して忘れ去られるべきではない作品というものがあり、本作もその1本になるでしょうが、そうした作品を言わば発掘する作業というものも重要になるのです。